



青森県太平洋岸の津波記念碑周辺の過去と現在の津波災害の聞き取りからの考察：おいらせ町、八戸市、階上町（特集 東日本大震災と防災）

森, 康成

(Citation)

兵庫地理, 57:1-14

(Issue Date)

2012-03-31

(Resource Type)

journal article

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/90003228>



青森県太平洋岸の津波記念碑周辺の過去と 現在の津波災害の聞き取りからの考察

—おいらせ町、八戸市、階上町—

森 康成

1. はじめに

2011年3月11日午後2時46分東北地方太平洋沖地震が発生した。その直後太平洋岸を津波が襲い、特に東北地方の沿岸部には甚大な被害をもたらした。筆者は以前宮城県の石巻市や志津川町周辺で地震や津波、津波記念碑の聞き取りをしたことがある。その時、海際の民家を見て非常に不安に思ったことを思い出す。今回の津波被害から1か月もたたない4月初めには石巻でボランティアをし、泥かきなどをした。石巻市立山下中学校の時計は2時46分で止まっていた。兵庫県県南部地震が発生したとき筆者は兵庫県立淡路農業高等学校に勤めていたが、建物の時計が5時46分で止まっていたのを覚えている。淡路高校の当時の時計は今はない。

阪神淡路大震災から17年がたち、震災の語り継ぎの風化が懸念されているが、関連のものが残っていれば語り継ぎもしやすいのではないだろうか。日本の各地には過去の地震や津波に関する石碑、記念碑、供養塔が多数残っている。筆者はこのような碑に関心を持って調査をしている(森 2005)。これらの碑に対してはさまざまな呼び方があるが、ここでは津波記念碑として話を進める。明治や昭和の記念碑には「海嘯」という漢字が使用されているものがよく見られる。読み方は「かいしょう」または、「つなみ」である。坪内祐三編集の『明治29年の大津波』は当時の復刻版であるが、「海嘯」には「つなみ」と「かいしょう」というふり仮名が見られる。大正5年の『最新国民日用辞典 全』には「つなみ[海嘯]海底の変動によりて大波の陸地に押し寄すること(p.252)」とあり、海嘯の字があてられている。大正9年の『提要地理學通論』には「津浪は主に火山の破裂または地震によりて起こるものにて時としては暴風のために生ずることもあり(p.47)」とあり「津浪」の字が使用されている。

筆者は、あまり知られていないと思われる青森県の太平洋岸に残る津波記念碑とその地元で今回の津波について聞き取りを行った。その調査から、津波記念碑と周辺地域の住民の災害に対する意識について考えてみたい。地元の人々の気持ちを伝えるために言葉を「」で示しているところがある。

ここでは、調査の経緯、各津波記念碑の位置とそれに関連する聞き取り及び今回の津波の聞き取り、まとめという順に論を進めたい。

2. 調査の経緯と調査地の概要

ここで取り上げる地域は青森県上北郡おいらせ町、八戸市、北上郡階上町である。太平洋岸で、ここには何基か過去の津波の記念碑が残っている。聞き取りは津波被害から2か月余り経過した2011年5月19日から23日にかけて行った。海岸線に在住の知人を見舞った後、ボランティアをしたいと考えたのが発端である。前もって電話で八戸市役所の社会福祉協議会で尋ねたところ「ボランティアはもうありません。登録している方が1000人ぐらいいますが、登録しますか」と言われて辞退した。また、2か月たった段階では、人の手作業はなくなり、重機での作業になっているという事であった。奥入瀬川が太平洋にそそぐあたりにあるおいらせ町も同様で、ボランティアの仕事はないと言われた。実際、おいらせ町役場分庁舎を訪問し、尋ねても同様な答えであった。「直後はかなりの方に手伝っていただきました。現在は家の解体作業の段階です」という役場の係のコメントがあり、実際、津波被害の海岸線を回っても、手作業のボランティアは不要のようであった。「ボランティアの気持ちだけでありがたいです」と役場の人に被災地域を案内してもらい、一般の人からは「お訪ねするところによっては喜ばれますよ。東北の人は自分から話をするのが苦手で、話を聞く

だけでも聞いて行ってください」と言われた。被災から間もないため遠慮しながら尋ね、「淡路島からです」という自己紹介に被災という事でお互い共感して話ができたといい事もあった。これが今回の聞き取りの経緯である。

津波記念碑は全国の海岸に、特に太平洋岸に多く分布しているが(大矢ほか 1996)、実際所在を確認するのは難しいものもある。インターネット検索をすると、宮城県や岩手県の三陸海岸の津波記念碑がヒットする。青森県のこの地域の場合、インターネットで検索してもヒットしなかった。書籍では『青森県の歴史散歩』で八戸市の館鼻公園に津波記念碑のあることが確認できた。後述する八戸市の蕪島も載っているが、津波関連の説明はない。これからわかるのは、この地域ではこのような史跡が注目されていないか、または、記述する側の認識があまり重要と考えていないか、であると考えられる。一般的に津波記念碑については、実際に現地での聞き取りや、役場や図書館訪問でその有無が判明する 경우가多々ある。ここもそれにあたった。

上北郡おいらせ町百石(もいし)の明神山(みょうじんさん)の記念碑はおいらせ町役場で、八戸の蕪島(かぶしま)や福昌寺(ふくしょうじ)、館鼻(たてはな)公園、三戸郡階上町大蛇(さんのへぐんはしかみちょうおおじゃ)小学校の記念碑は八戸

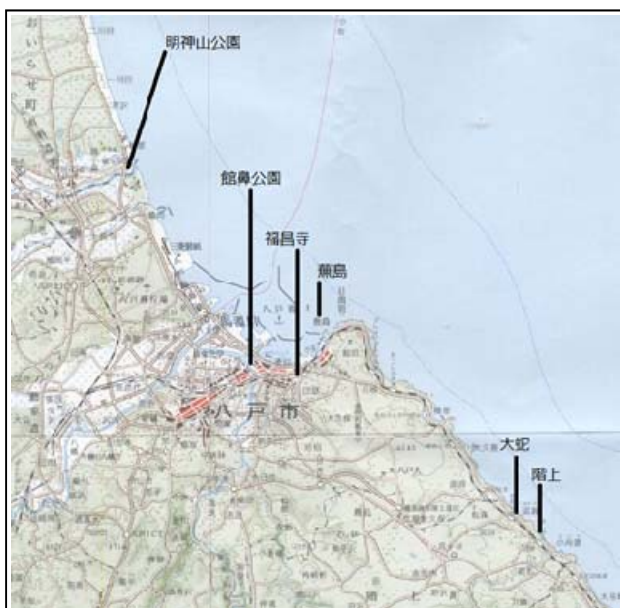


図1 八戸と周辺の津波記念碑の位置図
(国土地理院 20万分の1 平成21年利用)

市博物館で情報を得た。階上(はしかみ)駅の海岸の記念碑は大蛇(おおじゃ)小学校で情報を得た。蕪島についてはこの3市町の一般の人でも過去の津波被害は知っている人がいたが、津波記念碑の所在については具体的なことは知らなかった。それ以外の記念碑はその町内でも知らない人がいた。地元での津波記念碑の認識はこの様であった。

3. 青森県八戸とその周辺の津波記念碑と3・11津波

(1) 明神山(みょうじんさん)公園の記念碑

ここにあるのは昭和8年の昭和三陸津波の記念碑で、記念碑名は「震嘯災記念碑」である。おいらせ町松原という奥入瀬川と明神川の河口近くの小高い丘の明神山公園にある。地形図でも鳥居のしるしの横に記念碑の記号が確認できる(図2)。河口は百石漁港となっている。海に向かって左側の川が明神川で、海岸近くを海岸に平行に走っている県道の手前で蛇行している。蛇行の内側のところに少し高くなっている標高10m余りの山がある。汀線から直線距離で約500mである。山の南側の川に面する側は急斜面となっている。山の北側の方は民家がある。周

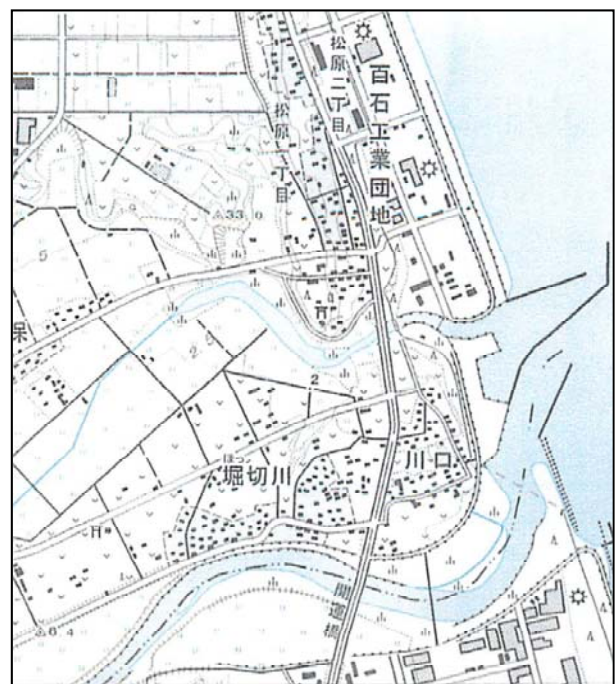


図2 おいらせ町明神山付近 2万5000分の1地形図「百石」平成10年修正の一部

りから見れば平坦な平野の中にあり、地形図ではその山の周辺は標高 2.4m や 2m の数字が見える。海岸の県道の方から見ると、津波の場合避難するのに好都合な場所と考えられる。

この山の上の木立の中をぬけた川を見下ろす崖の上に記念碑が立っている。小さい塔のようになっており、形容すれば灯台のような形である。高さは 4 m くらいあり、正面には、縦に大きく「地震海鳴りほら津浪」という太い文字が書かれている。わかりやすく印象的で、現代版だとキャッチコピーと言えそうである。裏に説明が書かれており、最後に昭和 8 年と書かれているので昭和三陸津波の記念碑だと分かる。以下は筆者が書き写したものである（役場で作成している冊子昭和 23 年『津波談義 全』に

標語を記したとある。「銘戒」は心に刻んで自分の戒めとするという意味である。したがって、この記念碑は、被害を忘れず心に刻んで戒めとする、という目的で建てられたと分かる。

この資料によると、昭和 8 年には、この辺りの地名の「川口」には 3.2m の津波が来たとある。川口は奥入瀬川と明神川にはさまれた河口にある集落で、この山の南側の明神川を挟んですぐ目の前にあたる。この山の周辺は現在の地形図で見ると、先に述べたように標高 2.5m 程度である。さらに、同資料では明治 29 年の津波について「明神山の中腹に船が乗せておった」という話も紹介している。この山の周辺は津波の被害にあったが、この山の上は被害にあっていないことが推測される。今回の 3・11 の地震津波は役場の職員に地形図を見ながら聞き取りした

震嘯災記念碑

維時昭和八年三月三日午前二時三四分
四八秒突如トシテ強震アリ、爾後半刻
ニシテ洋上遙カ大音響ヲ聞キ、閃光ノ発
スルヲ見ルヤ間髪ヲ容レサルニ海嘯ノ
襲フ所ト為ル怒濤天空ヲ摩シ摧ケテ地
上を濯フ一瞬多数ノ生命ヲ奪ヒ財産ヲ
拉ス阿鼻叫喚ノ聲随所ニ充チテ其ノ慘狀言
語に絶ス事

天聽ニ達シ畏レクモ救恤ノ資ヲ賜フ
皇恩無窮感激ニ堪ヘス聖旨ヲ奉戴シテ
官民一致此間ニ處シ孜々トシテ之ヲ復
興ニ懋メ其方途ヲ謬ヲス全國ノ同情亦
翕然トシテ聚リ以テ罹災民ヲシテ能ク
其全キヲ得シメタルヲ欣フ被害地住民
ハ永ク此被災禍ヲ追想シ宜シク之カ警戒
ト豫防ニ努ムルノ要有ラン干

斯ニ東京朝日新聞社募集ノ義捐金ヲ以
テスル此記念碑建設ニ當リ青森懸知事
多久安信標語ヲ記シ以テ深く銘戒セシ
ムト云爾

昭和八年十一月十一日
八戸 高橋鑄工作所

は一部写し間違いが見られる)。

この内容をみると、昭和 8 年 3 月 3 日午前 2 時 34 分 48 秒に起こった地震、その半刻後の津波という事実は書いてあるが、被害については、一瞬多数の生命や財産を奪ったと抽象的である。この冊子の時の呼び方表によると半刻は 30 分である。この津波被害のことで天皇に救済の費用を賜り、官民一致して復興に努めた、という復興に関わることが述べられている。後半部分は「被害地の住民は永くこの被災禍を追想して警戒と予防に努めることが肝心である」と述べている。これに東京朝日新聞社の募集した義捐金でこの記念碑の建設にあたり、県知事が

ところ、この山の近くでは、津波の来たのは標高では 2.5m ぐらいであった。低いところに一概に来たわけではなく、明神川の河口の堤防が切れているあたりから津波が浸入し、盛り土をして少し高くなった県道が海岸から約 300m のところを走っているが、その内側の水田も浸水した跡が見られた。山のふもとまではまだ 100m 位はあり、この部分の田は浸水していない。

松林が海岸にあり、その中に工業団地が作られている。ここの松林は残っている。「ここの工業団地の中に日本ハムがあるんです。養豚業があるという事がここへ工場が来た理由です。この周辺の農家は豚

と、墓地に墓石が並んでいる。石の台座にのった「海上遭難溺死亡霊之碑」と書いてある石碑が目につくが、これは昭和 46 年の海上遭難についてのものだと分かる。その横に、台座から高さ 231cm、幅 140 cm (白銀振興会 2004) の記念碑とわかる木の葉

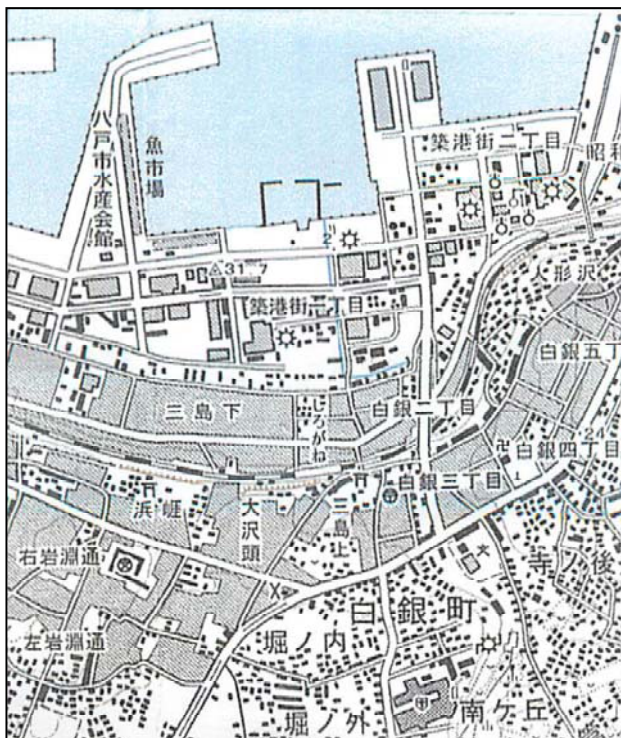


図4 八戸市福昌寺付近 2万5000分の1地形図「八戸東部」平成 17 年更新の一部

の形をした石を建てたような茶色の厚さ 20cm の薄い石碑がある。これがその石碑であるが、すぐ横で墓掃除をしていた年配女性はこのことを知らなかった。ここではこの石碑は関心を持たれていないのかと推察された。

明治廿九年六月十五日以宮城懸
爲中心大海嘯起延及岩手青森北
海道沿岸其慘狀也倒人家奪生命
不知其數幾萬嗚呼悲夫今爰木村
氏等之有志者爲發起欲建一大碑
以表吊魂之意乃遙寄簡令囑予紀
其事予嘉其丹悃不顧哀文聊記
其來由以塞其責云爾維時明治二十
九年八月初澣於相之金華山中
書三陸海嘯溺死者亡靈之碑陰
西有穆山撰 西有惠觀書

この石碑には、正面に「三陸海嘯溺死亡霊碑」と大きく彫られており、裏には漢文で 11 行彫られている。筆者が書き写したのが下の文である（この石碑の碑文については白銀振興会『白銀 歴史・文化の葉』があるが、一部筆者の読みと異なる。石碑の文字が読み取りにくい部分があり、別の解釈も考えられる）。おおよその意味は以下である。筆者が試訳した。（各行の区切りを / で表示した）

明治二十九年六月十五日宮城県を / 中心となす
大津波が起き、岩手青森北海道 / 沿岸に及び、その
惨状は人家が倒れ生命を奪い / 其の數幾萬か知ら
ず。ああ悲しいかな。今ここに / 木村氏らの有志は
發起し一つの大きな石碑を建て / 吊魂の意を表そ
うと思う。そこで、書簡を遠く寄せ、私に其の事を
記録させようとした。 / 私はその気持ちをうれしく
思うが、力が及ばない。哀文にいささか / その事情
を記し責任を果たすというだけである。時は明治二十
九 / 九年八月初旬、相模の金華山中にて / 三陸海
嘯溺死者の亡霊の碑の裏に書く

西有穆山が作り述べ 西有惠觀が書く

なお「文中の『西有穆山』とは、八戸出身の江戸～明治期の僧で、曹洞宗管長も務められた方で、その後の『西有惠觀』は、西有穆山のお弟子さん（八戸市博物館員談）」である。『大日本人名辞書』には「ニシアリ ボクザン」として 2 ページにわたって説明がある。この当時、遠州、相州における足跡が記されており、文中の「相」というのは相模の国で、当時西有穆山西有穆山は相模の国に在住していたと解釈できる。金華山は不明だが、木村氏らに依頼されて、ここでこの文をしたため、西有惠觀に書を書いてもらい石碑を彫った、と推測できる。この下には發起人の木村利兵衛ら 9 名と福昌寺の住職の名がある。

この石碑は、明治 29 年の津波に関するもので、その当時「三陸海嘯」と呼ばれたことがわかる。おいらせ町から階上町にかけて残る他の津波記念碑は昭和三陸津波のものであるが、これだけは明治三陸津波に関するものである。

する。一見プロペラの破片かと思うが、船のスクリューである。記念碑の高さは約 2m である。筆者は日本各地で津波記念碑を訪れているが、このような記念碑は他では見ない。前掲の前田によると次のようないきさつがあった。「船のスクリューの片方が自然石の上ののった珍しい『海嘯記念碑』が建立されています。昭和 8 年 3 月 3 日午前 2 時頃、三陸津波のため、函館市成田商会の蛟龍丸が、錨を下したまま港外に流され、蕪島の北方『うしこもね』に打ち上げられ、スクリューを折って遭難したのです。この時折れたスクリューを後に引き揚げ、昭和 9 年にこの碑が建てられてあります。」この蕪島の上からは、八戸の海と都市部を一望できる。

2 つ目は蕪島神社へ登る石段を少し上った右に八戸小唄と書いた大きな石碑があるが、向かってその右下 2, 3m の斜面の自然岩である。見えている岩の大きさは縦幅 1m 位である。「津浪」という文字とその下に横に線が彫られている。ここまで津波が来たという印である。消えかかっているが、「西の方を向いて『津浪・昭和 8・3・3・大西』と刻んであります。」と前掲前田の『蕪島神社』誌にある。これも昭和 8 年の三陸津波のものである。

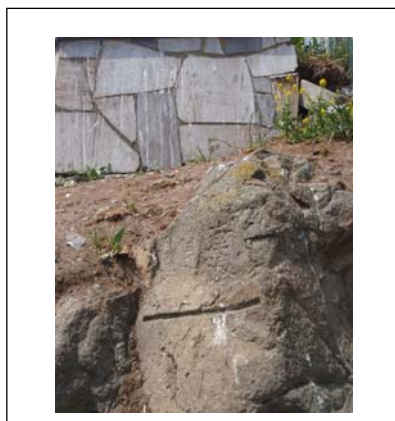


写真 2 自然岩に彫られた津波到達線

3 つ目は、そこから 20m くらい右の方へ回ったところの崖の急斜面にもう一つ津波のことを記した岩がある。「根崎の岸壁の根元に、西向きに刻まれ、その時の水位は、横 30 センチ位の長さで示されています」(前掲 前田)。文字も判別しにくいですが、そこにも横によくわかるように線が彫ってある。この宮司によると、今回の 3.11 の津波の高さは、昭和

8 年のその記念碑より大人一人分上であったという。これらの岩は島の崖の自然石であったためか、津波で流されてしまうという事はなかった。東奥日報 2011 年 4 月 26 日版では今回の津波高「蕪島 4.6 メートル」と報道している。

この石段の下で営業している屋台がある。聞き取りをすると「ここは地震があつてから 1 時間以上して津波が来ました。その時はみんな避難命令が出たので、ここには人はいませんでした。営業はしていませんでした。宮司さんはいらしたようです。神社は被害がありません。私は自宅は上(海岸の高台)です。ここは住宅はみな高台にあるんです。」という事で人的な被害はなかった。しかし、蕪島の周辺の埋め立てた地域は津波に洗われ、2 か月たった 5 月でも、公衆トイレは土台の地面が洗いさらわれて大きく傾き、蕪島と海岸の道路をつなぐ分厚い堤防のコンクリートは破壊され大きな塊となって転がり、アスファルトはあちこちはがれたままであった。

(5) 大蛇(おおじゃ) 小学校の記念碑

八戸市の南に位置する三戸郡階上町大蛇(さんのへぐんはしかみちょうおおじゃ)にある大蛇小学校の校庭に津波記念碑がある。名前は「海嘯記念碑」である。この大蛇小学校は海岸の道路を挟んですぐ急斜面の崖になり、その上にある。図 6 で、学校と道路の間に記念碑の記号が見える。汀線からは 100m あまりである。県道から小学校へ斜めに道がついており、その中腹に「海面より 11.8m」の表示板、さらに、校庭へ入る校門のところには「海面より 15.6m」の表示板がある。この表示板は校庭より小学生の眼の高さ位に設置されているため、校庭の高さは、14m あまりと推測される。海岸を見下ろす校庭の端には防風林のように松の木が植えられているが、そこに記念碑は建立されている。

高さ約 2.5m、厚さは約 10cm の 1 枚岩に彫られている。正面には大きく「海嘯記念碑」とあり、裏には小さな字で 15 行にわたって被害やこの碑を建立した経緯が彫られている。具体的に被害状況も記されている。碑文は筆者が書き写した。○印は不明の文字である。

昭和八年三月三日午前二時三十分強震アリ約四十分ヲ經テ大海嘯襲來シ
 家屋納屋漁船漁具魚粕等或ルハ倒壊或ルハ流失死者負傷者多數ヲ出スニ至
 レ
 リ其ノ慘狀ト損害タルヤ言筆ニ盡ス難シ顧〇ルニ明治二十九年六月十五日
 三陸大海嘯ノ際モ甚大ナル損害アリシカ今年更ニ大ナル損害ヲ蒙レリ住
 民タルモノ深ク銘記シテ將來ノ對策ヲ構セサルヘカラス乃チ之ヲ永遠ニ
 記念セシカ爲メニ村民相計リテ茲ニ此ノ碑ヲ建テタリ然シテ此ノ報
 天聽ニ達スルヤ畏レクモ御救恤金ヲ賜ハリ勅使御差達セラル、等皇恩ノ大
 ナルニ村民一同感激感泣セリ全國ノ同情モ亦多大ニシテ義捐金食料品慰
 問物等續々來リ殊ニ陸海軍部ニ於テハ卒先シテ被服寝具類ヲ急贈シ懸竝
 國ニ於テモ直チニ應急對策ヲ施シ村ヲ指導シテ一日モ早ク復舊セシコト
 ヲ圖レリ其ノ後着々復舊ノ途ニ就クヲ得タルハ主トシテ此ノ廣大ナル恩
 義ニ因ルモノト謂ハサルヘカラス村民ハ子々孫々ニ傳ヘテ海嘯ノ難ヲ恐
 ル、ト共ニ此ノ高恩ヲ永代ニ忘ルヘカラス今碑ヲ建ツルニ當リ爰ニ其ノ
 梗概ヲ誌ス

この文の下部には発起人として階上村長、助役、八戸警察署長と駐在巡查の名前が書かれ、「震嘯被害一覧」として被害や義捐金の額が書かれている。

「罹災戸數 199 戸、家屋流失 10 戸、倒潰 8 戸、浸水 12 戸、納屋流失及倒潰 53 棟、漁船流失 99 艘、破損 56 艘、動力船流失 1 艘、破損 6 艘、被害總見積額 101,434 円。死亡者前田由太郎 21 才、同南岩次郎 26 才、行方不明阪本兼松 33 才、重傷者 5 名、軽傷者 11 名、御下賜金 295 円、義捐金 19846 円、義捐品 3650 個」

明治の三陸大海嘯の文字があり、この石碑の建てられた昭和 8 年には、明治 29 年の海嘯は「三陸大海嘯」と呼ばれていたことがわかる。

明治の三陸大海嘯で甚大な被害があったが、今年もさらに大きな被害を蒙って、住民は深く心に刻んで将来の対策を講ずるために村民が相談してこの碑を建てた由が記されている。したがって、この碑の目的は、被害から対策を立ててほしいというものとして建てたと理解できる。

この大蛇小学校の校舎は、当時海岸を見下ろす崖際の松林があるギリギリのところであり、この津波記念碑はその横に建てられたものだということであ

る。「昭和 8 年はあそこは安全じゃなかった。70 年くらい前はこの辺も水浸しになったということを知っていた。今回はグラウンドまでは来なかった。津波の第 2 波が大きかった。第 1 波はあの絵を描いた堤防をのり越えてきました。道路へきました。それから水が一回引けてきて、そのあと 100m 位、礫が見えるくらい引いたんです。」と、この学校の教員が教えてくれた。「絵を描いた堤防」とは、下の道路の海側にある堤防である。地元の年配の人は、「昭和 8 年の津波は、波そのものの高さではないが、あそこ（津波記念碑）まで水が斜面を駆け上がった。」と話した。この小学校の下は、片道 1 車線の道路が走り、

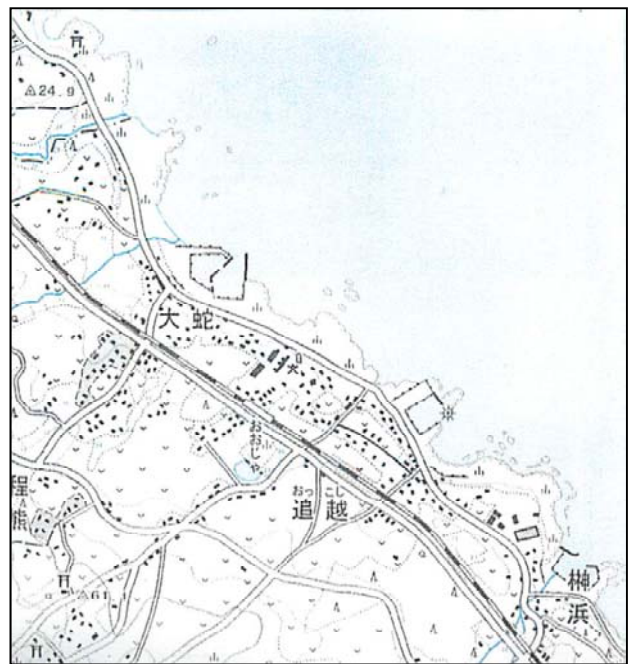


図 6 階上町大蛇小学校付近 2 万 5000 分の 1 地形図「角浜」平成 20 年更新の一部



写真 3 大蛇小学校の「海嘯記念碑」

その上側に漁師の納屋や店が数軒あるが、今回の津波ではそこが浸水した。小学校の下の海岸は船着き場になっており、漁船を海から引き上げるのに 50m ほどの幅広いコンクリートの斜面になっているが、津波は最初そこからあふれて侵入し、海岸の堤防の内側の道路部分を少し広がっている南の方へ流れた。1 棟の納屋は数十 m 道路に沿って流されたが、それは津波の後運んで元に戻した、と地元の人が語った。津波の高さは 6m あまりであったそうだ。東奥日報 2011 年 3 月 18 日では「国交省の調査で判明…階上町大蛇地区…8 メートル超」と報道している。

(6) 階上 (はしかみ) 駅下の海鳴りラインの記念碑

大蛇駅下の海岸道路から、南へ少し県道を進み、榊浜という漁港から海岸へ折れると「海鳴りライン」という道路になる。階上駅からの海岸の方へ下った海岸を走る道路である。この榊浜漁港に近いところの高台に記念碑が立っている。地形図では階上駅のすぐ海側には 18.3m と記された三角点があり (図 7)、この記念碑のあるところは標高 10m 余りと推測さ

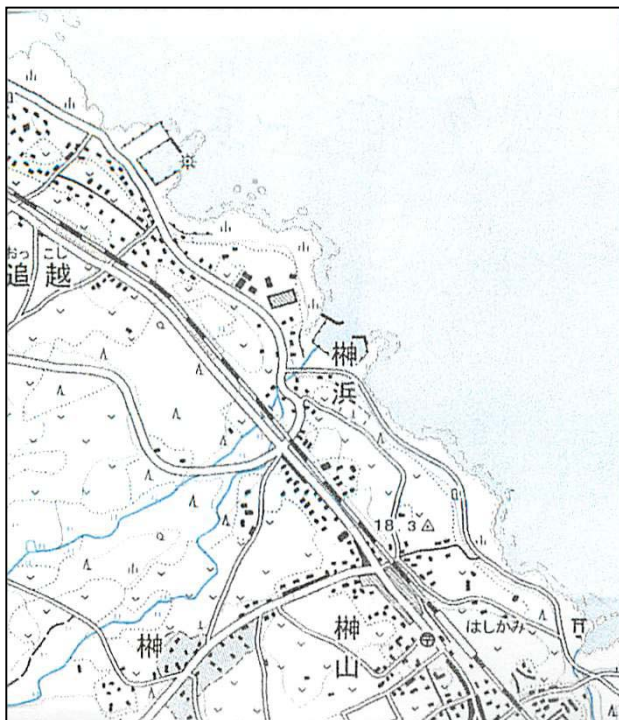


図7 階上町階上駅付近 2万5000分の1地形図「角浜」平成20年更新の一部

れる。整備された砂利道があり、その登り口のところに、「地震 津波が来るぞ 高いところへすぐ避難」と白地に赤や青の字で看板が書かれている。横には「三陸大津波記念碑」と書かれた標柱が立っている。この記念碑 (写真 4) は、遠くからでも一見して、百石漁港の近くの明神山、館鼻公園にあった海嘯記念碑と同じ形のものだと分かる。碑の前面には「地震海鳴りほら津浪」と彫ってあり、裏には「震嘯災記念碑」と説明が記され、明神山、館鼻公園のものと文言も同じであった。この記念碑の山側には松が植えられ松林となっている。海際の岩のあるあたりには、木切れやら瓦礫が少しあり、津波の来た跡が見られた。道路から上のこの記念碑のある方への斜面の中腹には、波でえぐられたような跡があった。



写真4 海鳴りラインの昭和8年の「震嘯災記念碑」

4. 津波記念碑周辺の高所居住に関する聞き取り

津波記念碑とその周辺での 3.11 津波の時の様子に関する聞き取りで、筆者の関心を引いたのが、八戸市から階上町にかけて聞き取った人のほとんどが、自分たちが住んでいるあたりで、人的な被害を含めて、被害が少なかったのは、過去の津波体験から、家を海岸の低いところに建てず、少し高いところに建てているという事であった。

(1) 蕪島と鮫地区

蕪島の海岸で 70 才の人に聞き取りをした。働くのは海岸だが、自宅は、蕪島の向かいの海岸から上がった高台にある。「ここは住宅は皆高台にあるんです。ここは線路が走っているでしょう。昔からその

下へは家を建てるな、と言われていました。両親は明治生まれです。両親から何回もあの下へはおうちは作るなときつくと言われてました。何回も聞きました。私は 50 年前のチリ地震津波も見ています。テレビなんか情報もなく、地震が来ないで、いきなりでしたから。下の方も何軒かありますが、民家はみんな高台にあります。漁師の人は作業をするときだけ下へ降りてきて、晩になったら帰るんです。」このように語った。

この話から、線路より下には家を建てないという事が、チリ地震津波よりさらに昔から言われていたことがわかる。

また、八戸線の上側の鮫漁港と蕪島を見下ろす鮫御役所横の集会所の辺りで、昭和 7 年生まれという人に聞き取りをした。図 5 では、寺の前の道路を挟んだ所である。ここは、八戸線の線路より一段高いところにあり、地形図では、標高およそ 17m である。この人の家はその近辺である。「今回の津波は線路の下側の民家のあるもう一つ下側に来た。親に聞いた話では、昭和 8 年の津波の時は蕪島が半分ほどつかった。その当時はこの海岸は砂浜で辺りには家がなかった。」と語った。

この 2 つの例は、親から過去の話聞いて参考している例だが、次に紹介する例は親から聞いていない例である。

蕪島横の漁港の昭和 26 年生まれの漁師で、今回の津波の時は、案内放送で大津波が来るという情報があったため、漁港から高台に逃げ、大丈夫だった。逃げたと指差した辺りは、八戸線の上側の標高 17、8m 付近である。津波が来た時の対処法について祖父母の代から何か言い伝えがあったかどうかについて、「なかったね。津波が来たことなかったからな。高いやつは。地震はけっこうあるけど。津波は初めてだよな」と語った。‘津波’は被害を与えるような津波という認識のようだった。「チリ地震の時は小さい子供であったので記憶にない。避難については、集落の下に建っている防災無線のスピーカーから津波の放送があった。津波は‘お’がついた。‘つなみ’じゃねえんだ。‘おおつなみ’が来ますから逃げてください。高台に。車置いて。だからあまり人が死な

なかったんだよ。青森県は 3 人だけ。みんな逃げたから。」とその時の少し上ずった調子の声をまねて話した。津波が来るまで 1 時間あったため、逃げることができた。

しかし、聞き取りで話してくれた人の中には、「線路の下道路に近い方にも、警察も消防署も今度は普通の津波じゃないっていうのに。なあにと思ってうちにいたら、津波が来て、アッと気が付いたら 1 階の上まで水が来ていた。よく助かったね、と言ってました。お年寄りが、2 階にいれば助かるだろうと言ったって。大丈夫と思っても津波というのはわからないですね。」と話す人もいた。



写真 5 鮫地区と八戸線の線路。右上は蕪島

まとめると次のようになる。ここでは、線路の上の高台にいた住民はそのまま、海岸にいた漁師などは防災無線を聞いてその高台に避難をしている。津波に関する言い伝えでは、聞いていない人もいるが、家はどこへ立ててはいけないという事を聞いている。線路より下に家を建てている人については、新しく来た人や家を建てる土地がなくてそこへ建てている、と言う話も聞いた。チリ地震津波を経験したり、さらに昔の津波被害について親から聞いたという人は、津波被害の事や避難の事について理解しているが、昔の話を聞いていない人もいる。

3.11 後のテレビ報道を見て、「岩手県は、0m に町があるんだもん。考えられないです。住宅はあんな 0m のところには建てないですね。明治から何回も来ていますので、言い伝えがありますから。」とこの辺りで聞き取りをした数人は語った。ほかの地区で

もこのように語る人がおり、過去の津波後の家の立地について、この辺りの地域で同様な意識が形成されていることが推測された。

(2) 大蛇小学校と周辺地区

今回の地震の時の様子を大蛇小学校の児童が次のように書いている。

いえにいたら、2じ40分ごろつよいじしんがありました。つよいままとまらなかつたので、おじいちゃんとおかあさんと、「そとに出よう」げんかんにいそいでいきました。ぼくは、こわくてあせっていたから、1ばん目に出たけど、くつ下のままとび出てながくつは、もって出ました。そとからいえを見たら、まどもポストもがたがたゆれているし、でんせんもゆれていた。おかあさんが、「ながいね。こんあにながいとつなみがくるよ。」といいました。ぼくは、つなみがきたら上のほうへにげなきゃとおもいました。

これは小学一年生の作文だが、地震の後すぐに外へ出て、様子を見て、津波が来たら上の方へ逃げる、という意識を持っていることがわかる。

では、具体的にはどうであったのか。小学校の教員からは次のように聞いた。「当日は何人かのおばあさんが来ました。70年くらい前はこの辺も水浸しになったということを聞いていました。」津波が学校下の堤防を越えたのは先に述べたとおりである。「この辺りの人は、危ない、危ない、大きいのが来るぞ。と叫んで、道路も閉鎖して、この学校に来るんじゃないかと思い、私たちも危ない、避難所にならないと思い、避難命令が出たので、この上に線路があるんですが、線路より上の方の方だと大丈夫だろう避難しました。」地域の方は「この辺りの人は小学校へ上がったが、線路より上に上があればよいということで、線路より上へ行った。」と話した。地形図を見ると、大蛇駅の上は、標高およそ20mである。裏の方は徐々に高くなっている。津波の後の訓練では、

この小学校では、津波前は校庭へ集まってから、道が丘の方に続いている方から逃げようという計画だったのを、それは海に近い方へ行くことになるため、直接校舎の前を通過して丘の方へ逃げるよう避難経路を変更している。

この大蛇小学校より低い道路沿いは納屋や店が被害を受けているが、海岸から見ると、家々はある程度高さのある所に立地している。別の児童は次のように書いている。自分の家が危ないので祖母の家に避難し、翌日、家は無事なのを確認したが、浜小屋が流されたと綴っている。

きのうじしんがありました。さいだいで十かいもこえました。ぼくは、おばあちゃんのおうちにいきました。・・・じしんがきて、そとにいきました。ぼくとおばあちゃんにくるまにのってねました。あさになってじぶんのおうちにいって見てだいじょうぶでした。じじとはまにいきました。じじのはまごやがながされて、2かいだけのこっていました。じじのふねもつなみにながされました。おもいであるふねでした。じじとおとうさんといっしょにあみでさかなをとった、おもいででした。ぼくはなきました。じしんとつなみはもうきてほしくはありません。



写真6 大蛇小学校（松林の所が小学校、手前の家は浜小屋、トイレなど）

ここ以外の海岸沿いでも、民家はある程度高いところに位置している。この海岸を北の八戸方面へ行った白浜漁港というところでは次のような話を聞いた。「この辺りは昔の経験から家は海から少し上の方に建てられている。そのため被害は少ないが、海際には比較的新しく建てられた民宿や店があり、それらがやられた。やはり、営業は海の近くでないとお客さんも来ない。ここらの人は浜には店を構えて丘の上の方に住んでいる。」これも生活の知恵だと考えられる。確かにこの海岸線は家々は一見してすぐ海の近くではなく、標高も少しある高台に家を建てている。筆者の見た、他県の多くの漁村では海岸の堤防一杯のところ、または、港のすぐ横に家を建てているところがあるのを考えると、この辺りは全く違っている。

(3) 館鼻近辺

ここに述べるのは、過去に津波の体験をしたあと、商売上の理由で移転したが、移転した結果、より安全となっているホテル（ホテルオーシタ）の例である。先に館鼻の記念碑について述べたが、そのすぐ南の八戸線に「むつみなと」と、新井田川（あらいだがわ）の橋を渡って西に行った所に「こなかの」駅がある。川岸には標高3mの記載が見える(図3)。この数字のある所から川を挟んで対岸の岸より一区画中に入った、鳥居の記号の道を挟んだ北側の区画にその旅館（やまだい旅館）があった。この辺りは、ホテルの社長によると「チリ地震津波は‘こなかの’の中まで来た。川をさかのぼってきて町の中まで来た。この新井田川の鉄道のところまで来た。うちの前の道路は海から1.5km離れていた。南横町の辺りだが、道路が川になった。カニとか魚を煮る大きい鍋や箱だとか流れてきた。船が川の両側にだっと上がってしまった。私は八戸の生まれでない。旅館をやっていたが、明け方いきなり女房の父親がきて『津浪がくる。こら逃げろ。』という。うちの旅館は道路より高く建てていたが、お客さんもいるし、困った。2階へあがって助かった。1階は浸水した。」と50年前のチリ地震津波当時の様子を語った。当時はこの旅館は、「土地を盛り、床も高くしていたので、床

上浸水は免れた」が、周りの家は津波が来てほぼ床上浸水したようである。今回の津波よりもチリ地震津波の時の方がより多くの家屋が被害を受けた。その後、商売上の理由から宿屋は現在の八戸駅前に移転した。八戸市の防災マップで確認すると、標高は約9mである。チリ地震津波の時は年は30歳そこそこで聞き取り当時は82歳であった。「20, 30年おきに地震か津波はやってくる。チリの後、十勝沖地震、はるか沖地震は地震そのものは強かったが、津波はそうでもなかった。津波の被害も地震の被害もいまだかつてない。津波被害は忘れてしまうんです。」と語った。客がいるため、チリ地震津波より以前から土地をかさ上げしており、また、移転したのも意識として津浪対策もあったのかもしれない。

宿の近辺の人で、高台に移転した人はいなかったという事である。白銀町にあったこの旅館の親戚の家は津波により破壊されてしまったが、当時国による支援策もなかったので同じ場所に建てなおしたそうである。今回の地震と津波の後の対策については、「移転するのが一番だ。今回の被災した人もやはり海から津波が来ないところに家を建てるべきだろう。」と述べた。

(4) おいらせ町百石

先に示した『津波談義』によると、昭和23年当時、津波の避難施設の項目では、退避訓練、高地移転、避難道路の築造、防浪堤、護岸等の設置、防潮林の育成、記念碑の建立が挙げられている。宇佐美(1996)によると、集落移動形式として、川口は1896年も1933年も分散移動となっている。この明神山の近辺では防潮林があり、昭和8年の津波では効果があったためか、現在も低い所に家々が見られる。現在の地形図と明治29年当時の地形図(菊池1982)を比較しても、集落の立地の様子に変化はないように見受けられる。明神山からさらに海岸に沿って北へ200m離れた深沢という集落については菊池は「墓地に明治29年6月15日と刻まれた墓石が極端に多かった。」と述べている。先の『津波談義』によると、明治29年は死亡者は深沢53、川口6、昭和8年は川口1、となっている。今回の3.11の津

波では、百石漁港の裏の川口集落が被害にあったのは先に述べたとおりである。この地域では被災体験については少々聞き取りをしたが、集団移転については聞き取りをしていない。

5. まとめ

津波記念碑とその周辺の住民の津波に対する聞き取りから次のような点が分かった。

まず、調査した地域では津波記念碑は、過去の津波到達地点よりは高い所に設置されるか、過去の津波の到達地点に建てられており、今回の3.11の津波では津波の被害にあってはいない。ここで見た記念碑は、おおむね高台に設置されており、避難の一つの目安になるではないか。明神山、館鼻、福昌寺の記念碑は、ここまで津波が来たという印ではなく、被害の記録と後の対策のために建てられている。大蛇小学校と、階上駅下の海鳴りラインの記念碑はここまで津波が来た、という印と考えられる。避難の目安にはなる。しかしながら、大蛇小学校区で聞き取ったように、臨機応変に対応し、適切に判断をして避難するという決断が求められる。

他県の太平洋岸の地域には、実際、被害のあった場所に記念碑を建てており、その周辺は現在家の密集地や集落になっている事例も見られる。そのような観点から見ると、この地域は津波に対する意識が、他地域と異なる点である。災害文化と呼ぶべき意識であろうか。

ここに住む人々は、過去の津波体験から、それぞれの地域で津波に対してある程度明確な基準が言い伝えられている。八戸線より下に家を建てない、または、海岸より少し高い所に家を建てる、などである。ここで取り上げた八戸と大蛇の間の八戸線については、昭和三陸津波の直後の様子で「八木駅から種市寄りの箇所が崩壊したのと、倒壊家屋のため汽車不通となり午前9時38分八戸駅を通過して救援列車が急行した。為に久慈駅発は八木駅、尻内駅発は種市駅で折り返している(『津波——語りつぐツナミ』)」という記述がある。尻内駅は現在の八戸駅で、種市は大蛇よりさらに南へ行った町である。昭和8年の津波では八戸線のここで述べているあたりは被

害がなかったことがわかる。また、福昌寺の記念碑のところで述べたが、明治三陸津波で八戸線のところまで津波が来ていたのであれば、人々の「八戸線の下には家を建てるな」という意識形成が大正の頃よりなされていたことが推測される。

明神山、館鼻公園、階上海岸で見た記念碑は、被害を忘れず心に刻んで戒めとする、という目的で建てられたと分かった。その周辺で聞き取りをした人たちの心の中では、過去の被害が忘れずに残っていたこともわかった。石碑が人々の心に影響を及ぼしているのかどうかは、今回は調査をしていないため、不明である。また、大蛇小学校の石碑には、明治の三陸大海嘯で甚大な被害があったが、昭和8年もさらに大きな被害を蒙って、住民は深く心に刻んで将来の対策を講ずるために村民が相談してこの碑を建てた由が記されており、したがって、この碑の目的は、被害から対策を立ててほしいというものとして建てたと理解できる、と先に述べた。その周辺では、家々は少し高い所に位置し、石碑に書かれた対策の意味は少しは実現されている、と感じ取ることができた。

しかしながら、聞き取りからは、過去の津波被害とその教訓が親から子へ伝わっていない例もあり、また、津波記念碑について一般に知られていないこともわかった。今後、昭和三陸津波や50年前のチリ地震津波の経験者が減少していく過程にある中、どのように語り継いでいくかが、課題であると感じた。

筆者は、勤務校で防災科目を週2時間教えてきた。淡路島富島は兵庫県南部地震を体験した。断層のある地元として、生徒は体験者に話を聞き、震災を語り継ぐ試みなどもしている。淡路島南部の福良では過去に南海地震やチリ地震津波で被害を体験している。しかし、生徒は淡路島の津波についてもほとんど知らない。三陸地方の津波についてもテレビのニュースで見る以外ほとんど知らない。筆者は聞き取りをしたこの八戸市を中心とした津波記念碑と人々の意識や津波に対する考え方について授業を行った。ここに載せた小学生の作文も読み、メッセージを送るなど交流もできた。淡路島の生徒にとって青森は

遠い地方であるが、少しは学習できたことと思う。筆者は部活動では社会研究部の生徒と北淡震災記念公園で時々活動しているが、2年前八戸からの大学生数人が生徒の語りべ活動を聞いた後で、津波の話をしてくれた。「はるか沖地震津波(1994)の時は小さな湾に住んでいた。山へ逃げて何とか助かった。青森の半島の方にすんでいた人は、北海道南西沖地震(1993)が大変だった。」と語ったのを思い出す。

今後の研究としては、機会を見てさらに聞き取りをしたいと考えている。

謝辞

聞き取りでは、おいらせ町分庁舎、八戸市博物館、大蛇小学校、蕪島神社、ホテルオーシタや地域の方々に大変お世話になりました。また、漢文については国語や中国語の先生に参考意見を頂戴しました。ここに記して感謝といたします。

参考文献

青森県高等学校地方史研究会(編)(2007):『青森県の歴史散歩』山川出版社
宇佐美龍夫(1996):『新編日本被害地震総覧』増補改訂版, 東京大学出版会
大矢雅彦他(1996):『自然災害を知る・防ぐ』第二版, 古今書院
菊池万雄(1982):『図説日本の災害』古今書院
四戸松三郎(編)(1948):『津波談義 全』, 百教委資料平成2年(復刻版)
白銀振興会(2004):『白銀 歴史・文化の栞』白銀振興

会

大日本人名辞書刊行会(1974):『大日本人名辞書(第3巻)』講談社

種市歴史民俗資料館(1988):『津浪 ——語りつぐツナミ——』種市歴史民俗資料館

地方史研究協議会(2004):『風土と歴史 ——南部の地域形成——』雄山閣

坪内祐三(編)(2011):『明治29年の大津波』毎日新聞社

東奥日報(2011):『八戸・階上8メートル超』東奥日報2011年3月18日朝刊

東奥日報(2011):『津波 最悪なら20メートル級』東奥日報2011年4月26日朝刊

八戸市防災マップ:

[http—www.city.hachinohe.aomori.jp-bousai-bousaimap-pdf5000](http://www.city.hachinohe.aomori.jp-bousai-bousaimap-pdf5000).

原口強・岩松暉(2011):『東日本大震災津波詳細地図』上巻, 古今書院

文盛堂編集部(1917):『最新國民日用辭典 全』文盛堂書店

前田亀造(1996):『蕪島神社』, 蕪島神社創建700年奉祝奉賛会

森康成(2005):津波防災学習, 地理50-5, pp.100-106.

山崎直方(1920):『普通教育 提要地理學通論 全』東京開成館

(もり やすしげ 兵庫県立淡路高等学校教諭)